



TITLE:

黄巢の亂 (特集 唐代史の諸問題)

AUTHOR(S):

善峰, 憲雄

---

CITATION:

善峰, 憲雄. 黄巢の亂 (特集 唐代史の諸問題). 東洋史研究 1956, 14(4): 319-340

ISSUE DATE:

1956-03-30

URL:

<https://doi.org/10.14989/139053>

RIGHT:

## 黄巢の亂

善 峰 憲 雄

九世紀の中頃になると、唐朝支配下の中國は、絶望的な様相を呈して來た。この状態を切り崩し、新しい時代を切り開いて行ったのは、民衆の力であつた。それは先づ叛亂という形であらわれた。

小太宗と謂われた宣宗代はともかく一時を糊塗し得たが、次の懿宗の代になると、早々に爆發した。その第一が裘甫の亂（八五九—六〇）である。浙東に亂を起した裘甫ら百人程の集團が、僅か二三ヶ月の間に、山海の諸盜・他道無賴亡命の徒四面雲集し、その數三萬に至り、各地の群盜麾下に屬するを求める状態になった。<sup>1)</sup>これは一年程で終結したが、各地に分散している群盜・草賊や農民が、何かのきっかけ

を求めて大勢力を結集し、反唐朝鬭争を展開する序幕となつた。

かゝる時期に危険な對外戦争が始まつた。咸通元年の末から、七年の暮れまで八年にわたり、南詔と安南を争う戦争を繼續している。この爲各地の兵が相繼いで大動員され、又おびたゞしい軍需物資の調達・輸送が民衆の上に重壓となつてかゝつて來た。<sup>2)</sup>この危険な時にあつて、懿宗は宴遊にふけて莫大な國費を浪費し、政事は宦官と一部權臣の手で左右されていた。

この對外戦争は、果してそこから龐勛の亂（八六八—六九）を引き起した。六年に及ぶ僻遠地への動員を忌避して、戦線を無斷離脱し、故郷へ歸らんとした龐勛ら徐州兵の叛亂をきっかけとして、各地の草賊・群盜・失業農民（逃戸）

から、下層農民、一部豪族層まで廣汎な民衆を結集し、一年半に及んだ。これについては谷川氏最近の研究に詳しい。<sup>4)</sup>こゝで注目すべきは、袁甫の亂から十年も経ていないのに、結集された勢力の大きさと熱烈さは、比較にならぬ程大きく又激しくなっている事である。宿州では、一日の中四遠雲集したとあり、彭城を攻めた時、住民が積極的にこれを手傳い、即日附従を願うもの萬餘人という。又徐州占領後は、光蔡淮浙兗鄆沂密等の群盜が道を倍にして集り、附近の住民は、父は子をやり妻は夫をはげまして、農具を武器に造りかえてこれに應じている。<sup>5)</sup>

かゝる氣運の高揚にかゝわらず、兩者共比較的短年月で失敗に終った點について、王丹岑氏及び谷川氏は、かゝる客觀情勢と、參加の農民の革命性を本當に評價し得なかつた指導者の誤の故であると指摘されている。<sup>6)</sup>袁甫は、部將劉咼の戰線を擴大し、各地から大舉呼應するものを結集すべしという積極策を採らず、知識分子の進士王輅が「今中國無事」という客觀情勢の認識から、これを危険とする説に動かされている。その點唐朝の司令官王式の方が的確に認識していた。彼はこの地方の群盜・農民が大舉呼應して

蜂起する事を恐れたのである。それ故に速決主義を採り、又諸縣の倉を開いて賑給し、農民の敵に走るを防いで効を収めたのである。<sup>7)</sup>龐勛の場合は元來徐州軍傭兵の叛亂が中心であるだけに、龐勛は節鉞を求めるといふ利己的目標、部下の兵士も又傭兵的な狭い視野を脱し切れず、従つて農民の立場を理解出来なくて、失望した群衆の脱離を招いたのである點が指摘されている。<sup>8)</sup>

「徐賊餘黨猶ほ閭里に相聚つて群盜となり、兗鄆青齊の間に散居す」<sup>9)</sup>と記録されている如く、この二つの亂を通じて訓練された者を、民間に廣く分布させて了つた。やがて龐勛的な指導者を否定する農民は、なんらかのじぶんたちの指導者を、じぶんたちの手によつてうみ出してゆく、そこに黃巢の亂への發展への途を池田氏は又指摘されている。<sup>10)</sup>黃巢の亂において、龐勛的な要素を次第に脱落させつゝ、ねばり強い鬭争を展開している點、確かにこの指摘は正確である。

又この時期に、反抗的氣運の高揚は、農民が團結して、無道の地方官を逐い拂う事件となつてあらわれ出している。龐勛の亂の起る直前懷州の民が旱を訴え、刺史がこれを容

れなかつたのでこれを放逐している。又龐勛の亂の後、咸通十一年光州で同様な現象が起つた。唐朝でも相繼ぐこの種事件にあわてゝ對策を考え出してゐる。<sup>11)</sup>

裴甫の亂から龐勛の亂の間に、南詔との戦争等を媒介として客觀情勢の深化があつた如く、龐勛の亂から黃巢の亂への間にも、又客觀情勢の深刻化を媒介としてゐる。次に<sup>12)</sup>ますかゝる問題から入つて行こう。<sup>13)</sup>

〔註〕

①通鑑二五〇・咸通元年。

②咸通三年二月には許滑徐汴荆襄潭鄂等から三萬人。三年十一月には荆南湖南兵二千。山南東道兵千人。四年七月には山東兵萬人。五年三月には許滑青汴兗鄆宜潤八道の兵、その他禁軍が動員され、四年正月には十五萬人、五年三月には五道兵八千人が全滅してゐる(通鑑二五〇)。

③舊紀咸通三・夏。通鑑二五〇・咸通四・閏六。

④谷川道雄氏・龐勛の亂について・名古屋大學文學部研究論集XI史學4。

⑤通鑑二五一。

⑥王丹岑氏・中國農民革命史話。谷川氏前掲論文。

⑦通鑑二五〇・咸通元年三月・四月・七月。新王式傳。

⑧王丹岑氏・谷川氏。

⑨通鑑二五二・咸通一一・四。

⑩池田誠氏・唐宋の變革をどう展開するか・東洋史研究一三の三。

⑪新紀・咸通八・七・乙巳。通鑑二五〇。

⑫通鑑二五二・咸通一一・五。

⑬裴甫・龐勛・黃巢の亂を發展的系列について考察したのは、王

丹岑氏及谷川氏の前掲書に詳しいので、今要點のみ略記した。

◎引用書名略號について。新・舊は新唐書・舊唐書の略。新紀は新唐書本紀、舊王式傳は舊唐書王式傳の略。以下これに準じる。通鑑は資治通鑑の略。

## 二

以上の様な情勢の中に僖宗が十二歳で擁立された八七三年頃には、危機は全く深刻さを増してゐた。しかも中央の支配官僚の利己心はこれに對して不感性になり、盲目的であつただけに、一層深刻なものであつた。よく引用されるものであるが、通鑑の概説は簡にして要を得てゐる。

上年少にして、政臣下にあり。南牙北司互に相矛盾す。

懿宗より以來、奢侈日に甚だし。兵を用うること息まず、賦歛愈々急なり。關東連年水旱、州縣實を以て聞せず。

上下相蒙く。百姓流殍するも控訴する所なく、相聚りて盜となる。(下略)

具體的な事は例述するまでもないが、たゞ逃戸の發生について一言觸れておく。内亂發生の第一歩は逃戸の大量發生である。農民の唯一の生存手段である土地を放棄せねばならぬ、或いはこれを耕作しているより放棄する方がましであるという一見矛盾する論理で、とことんまで追いつめられた農民のどたん場の姿である。水旱害や戰亂が大量發生の第一次的原因になるが、更に大切なのは、唐代官僚組織の人爲的な逃戸の擴大生産である。逃戸の負擔していた税額を、残りの戸に割り當て、地方官として責任ある總額を減少させない方法——攤配の現象である。繰り返えし繰り返えし禁止の詔勅が記録されている程、永い歴史を持ち、甚だしいものであった。近くは僖宗即位の前年咸通十三年六月の中書門下の奏にも強調して論ぜられている。その結果は、「安居不遷の民、賦役日に重く」「一室空にして四隣亦盡く」という事になる。何故かゝる現象があらわれるのか。地方官の最大の役割は租税徴収にあり、その成績を左右した。即ち戸口の増減によって成績が左右されるので、逃戸が出て税額の減少を來さず、戸口數の減少をかくす爲である。従つて逃戸が大量に發生する天災時にも、これ

を報告し、適切な處置を取らず、責任徴税額の確保のみを心がける結果となる。前掲通鑑に「州縣實を以て聞せず、上下相蒙く」というのはかゝる事情を指している。懿宗朝に、民が旱を訴えたがきかなかつた刺史を逐い拂う現象があらわれ出したのは、逃亡という消極的反抗から、積極的反抗に轉化し出して來てゐることを物語っている。

この苦しみを天下のうち、誰に訴える術もない彼らは、相あつまつて盜となつたと通鑑は記している。それはひとり農民ばかりではなかつた。舊黃巢傳には、時の政治の亂脈を述べて「賢豪忌憤して退いて草澤にゆく、既に一朝變あれば天下離心す。(黃)巢の起るや人士従つてこれに附す」と述べている。

懿宗十四年間、前述の外征、内戰について旱水害が頻々とやつて來た。新唐書五行志その他でざつと拾つても十四回をかぞえる。僖宗即位の一年前、咸通十三年にはすでに次の様であつた。諸道州府は兵戈や災沴の餘り、戸口逃亡し、田疇は荒廢している。郷間は屢々征徭に困窮している。しかも裕藏は耗竭している。徴斂を緩かにすれば供須に闕けるし、期限を促せば貧苦を壓迫することになると。

翌年咸通十四年八月關東河南の大水害があり、それに大旱魃がついて、夏の麥、秋の收穫、しかも冬期の野菜も全滅して了った。丁度僖宗その年の八月に即位した早々である。しかもその年の春三月懿宗死する直前、法門寺に佛骨を迎えて、莫大な費用を浪費していた直後の事である。その時の悲惨な有様はその年の冬、年は明けて咸通十五年（十一月改元乾符元年）正月早々翰林學士盧攜の上言にまざまざと描寫されている。<sup>9)</sup>即ち去年關東の旱災は虢州から海に至る間に及び、麥は半收に過ぎず、秋の收穫は殆んどなく冬菜も至って少い始末、貧者は蓬の實を礎でひいて麵をつくり、槐の葉を蓄えて蠶とする状態である。常なら凶作でない地方へ散じて行くのが普通だが、今度は何處も飢饉で依投する所もない。たゞなす術もなく郷間にしがみついて死を待っているばかり。しかるに州縣は上供・三司錢などの督促甚だ急で、捶撻を加えるに至るので、彼等は、家屋を撤し木を伐り、妻を働きに出し子を賣って納めるが、それもとゞ催督の吏の酒食の費に供し得るのみであるという有様であったと記している。そして盧攜は、春になって芽が出るまで今數ヶ月の間あるが、最大の危機であると警告

している。しかしこの警告も採り取られず空文に終ってした。了った。

果してその後所謂群盜の充滿、蠢動が始まる。又農民の地方官への反抗が起っている。その年の冬には感化軍が、群盜の寇掠をもてあまして援軍を求めている。<sup>10)</sup>又商州では農民が團結して刺史王樞ら官吏を毆殺している。<sup>11)</sup>かゝる情勢の中に王仙芝・黃巢が事を舉げると、たちまち數萬の數となったのである。翌二年四月には浙西で狼山鎮遏使王郢らが起した亂をきっかけに、萬人近くが結集されたのである。

〔註〕

- ① 通鑑二五二・乾符元年末。
- ② 唐會要八五・逃戶條。
- ③ 舊紀一九上。
- ④ 新唐書食貨志(二)・德宗貞元四年詔。
- ⑤ 大和三年五月中書門下奏・開成元年八月中書門下奏(唐會要六八刺史上)・會昌六年五月勅(同書六九刺史下)等。
- ⑥ 唐會要八五・逃戶・會昌元年正月制。「諸道頻りに災沴に遭うも、州縣申奏を爲さず、百姓輸納辨ぜず多く逃亡あり。」
- ⑦ 舊紀・咸通一三・六・中書門下奏。
- ⑧ 舊紀・通鑑二五二。

⑨ 通鑑二五二・乾符元・正・丁亥。全唐文七九二・盧攜集。  
 ⑩・⑪ 通鑑二五二・乾符元・一二。

## 三

この亂の中心人物は言う迄もなく王仙芝・黃巢である。

龐助の場合と異つて、彼等が本來反唐朝的な民間人である事が、この亂の出發點から一つの方向を指定している。王仙芝・黃巢共に當時政府の專賣であつた塩の密賣商人であつた事はよく知られている所である。しかも相當大規模な經營をしていたらしい事は、新唐書黃巢傳に「世々塩を鬻ぎ、貨に富む」とある事から察せられる。又かなりの實力を蓄えていた集團を形成していたと思われる事は、黃巢が任俠を喜び、又喜んで亡命を養つていたなどの消息からうかがえる。

肅宗の乾元中塩の專賣が始まつて以來、國家財政に占める比重が時と共に増大し、それと共に塩價を次第につり上げて來た。專賣前一斗十錢であつたが、以後は二百〜三百錢位となつた。<sup>4)</sup>爲に民「淡食する者あるに至る」——塩を食する事が出來ぬ者もあらわれたという。それと共に塩の

密賣の利を追うものが流行した。以後密賣の流行と取締の強化がお互に競争して、その間の緊張を増大し、危機を醸成して來ていた。德宗時代すでに「亭戸法を冒し、私鬻絶えず。巡捕の卒州縣に遍し。塩價益々貴にして、商人時に乘じて利を射る。」<sup>6)</sup>とも、「其の後軍費日に増し、塩價益々貴し。數數斗を以て塩一升に易う。私糶法を犯し、未だ嘗て少しも息まず」<sup>7)</sup>とみえる。黃巢の亂の二三十年前には、糶塩少く、私盜多き州<sup>8)</sup>があつた。これの取締りも憲宗時代から強化され「こゝにおいて貞元酷を加う」<sup>9)</sup>と言われている。更に宣宗時代には「茶塩の法益々密になつた」<sup>10)</sup>。本人は勿論關係者も死刑の極刑で臨み、その地方官も罰せられる事になつていた。これに對し密賣者の方も大規模な組織を持ち、車驢をつらね、弓矢で武裝するに至つていた。<sup>11)</sup>黃巢が、任俠を喜び、亡命を養つた事、又彼自身、擊劍騎射を善くした<sup>12)</sup>という事も、かゝる情勢において理解出来る。

當時の記録では、王仙芝・黃巢を「塩賊」と記している。<sup>13)</sup>この事は、發展したこの亂の性格はどのようであらうと、發端において認められる所である。塩の專賣と密賣の緊張、

その破綻が大叛亂の動機となる事は、つとに宮崎博士が指摘されている所である。<sup>14)</sup>かく見て來ると、亡命や任俠の徒を輩下に集め、武裝力をもって、塩販賣に従事していた闇商業資本家の一族が、初期黃巢集團の姿であつたと思うのである。<sup>15)</sup>

所でかゝる姿で、所謂塩賊なるコースで出發するこの亂が、どのような發展をし、又それに従つて、どのような性格をとるか、又黃巢・王仙芝が、いかなる立場を取るか、商人的立場か、農民的立場をとるか、はた又當時に一般的な節度使(軍閥化)への途をたどるか、更に問題となる所である。

〔註〕

- ① 通鑑・新舊傳・舊紀等。
- ② 通鑑二五二・乾符二・六。
- ③ 新巢傳。
- ④ 新舊食貨志による。
- ⑤ 新食貨志。
- ⑥ ⑪ 新食貨志。
- ⑫ 新巢傳。
- ⑬ 全唐文八七及舊紀・乾符四・三・諭河南方鎮詔。
- ⑭ 宮崎市定博士・東洋に於ける素朴主義の民族と文明主義の社會。

⑮ 黃巢兄弟八人、甥などが中核を形成している。後述。

四

次に黃巢集團がどのような要素で構成されていたかという事を一瞥して置こう。記録に出て來る人名を拾えば三十人位は算えられるが、その素性・性格などわかるものはごく僅かである。新唐書黃巢傳によれば、王仙芝集團の幹部は、尙君長・柴存・畢師鐸・曹師雄・柳彥璋・劉漢宏・李重霸等十餘輩とある。黃巢集團は黃巢・黃揆・昆仲八人と舊傳にみえ、新傳では、兄存・弟鄴(通鑑は思鄴)・撥・欽・秉・萬通・思厚の八人兄弟、及び甥の林言をあげている。うち活躍するのは、黃鄴・黃撥及び林言である。最有力幹部は、王仙芝集團では尙君長、黃巢集團ではその弟尙讓及び朱溫である。尙讓は兄尙君長、次いで王仙芝が殺された後、その集團をまとめて黃巢をかつぎ上げて、その參謀とも推進力ともなっている。この尙君長・尙讓については、如何なる人物かわからぬのは残念である。

① 科舉試験の落第者

これは支配者階層・知識階級へのコースを志向しつゝ、



果されなかつた者である。まず黃巢自體がそれである。こゝで塩商としての黃巢のみならず、彼の立場を綜合的に考へてみておく。記録には「粗々書傳に渉る」<sup>1)</sup>「稍々書記籍給に通ず」<sup>2)</sup>と、そして「屢々進士に擧するも第せず」<sup>3)</sup>とある。それについて、黃巢は、世々塩商を營み、富裕であつた事を述べて置いたが、さきに堀敏一氏も、この點を採り上げて、均田農民の中から成長して來た地主・商人層であつて、やがて中央進出をはがつたが、それに失敗した失意不逞の徒の類型に入るとされている。<sup>4)</sup>ともかく、均田制のくずれると共に、商品流通・商品市場の擴大に伴う新しい社會勢力が、前期的商業資本家の勢力であつた事は明らかに事實である。そして彼等が政治的進出を、權力へのコースをはかる事は、當時にあつて、自らなる途であつた。それがなかなか達成されない所に第一次的不満がある。更に又この途は、家柄なき者には、誠に窄き門であつた。即ち貢舉猥濫にして、勢門の子弟交々相酬酢し、寒門の俊造は十に棄つること六七であるという狀況であつた。<sup>5)</sup>こゝに度重なる落第という個人的不運の責は、社會的・政治的——むしろ唐朝支配者層のもつ「惡」のせいであるという、一

般化された、第二次的不満へ擴大される。黃巢が廣州から北伐を決行する時のスローガンに「銓貢才を失す」とか、<sup>6)</sup>「故なき事ではない。實に黃巢において、當時の政治・社會的矛盾が、幾重にも重なつて集約されている。塩の專賣と密賣、新興勢力の問題、家柄なき者の萬年落第と、それに關する官僚の腐敗と科舉制の紊亂など、そしてそれらの何れに於いても、敗北者として追いつめられている、行き場のない黃巢の姿である。

科舉落第生として、敬翔・謝朧の二人を拾える。敬翔は代々官僚の家柄、父は集州刺史で、彼は讀書を好み、應用敏捷といわれ、乾符中の落第生<sup>6)</sup>、謝朧は咸通末の落第生である。<sup>7)</sup>この種の知識分子の不満者が、軍閥や又諸叛亂に加わっている事の多いのは、史料に散見する所であるが、前述裘甫の亂の場合にもこれが重要な役割を果している。今この二人とも黃巢が長安を陥れた時の参加者で、末期の加入者であるが、謝朧は、朱溫が途中で唐に降るについて重要な關係をもっている點注意す可きである。

#### ◎官僚の家柄

官僚を出している家柄に屬する者からの参加者は、他に

葛從周及び張歸霸・張歸厚の兄弟がある。張兄弟は、黃巢が事を起すと共に家を棄て、参加している。<sup>8)</sup>

### ⑧ 農民で官吏への反感から出たもの

張全義は、黃巢の長安政府に於いて吏部尙書となった者であるが、黃巢と同じく濮州の人、世々田農、役について縣の耆夫となったが、縣令に辱められて亡命し黃巢集團に参加した者。<sup>9)</sup> 又一時黃巢軍に加わった諸葛爽も役について伍伯となり、縣令に笞打たれて反抗的に亡命、流し藝人となり龐勛の亂に参加、後唐に降り、又後黃巢に味方している。<sup>10)</sup> さきの農民が地方官を逐い拂っている例などと共に、行き方は異なるが、地方官吏への反抗的なコースの一端である。

### ⑨ その他

大物では朱溫。まじめな生業が嫌いで、性情憤、傭人となったりしていたが、黃巢起兵と共に勇躍参加、この方は天性に合ったのか大を成した。<sup>11)</sup> 又李罕之は儒にして成らず、僧となったが性無賴、後盜となったが、黃巢軍に参加したもの。<sup>12)</sup> 又秦彥は徐州の卒であったが、乾符中盜に坐し獄に繋かれたが、亡命し徒百人ばかりと縣令を殺して黃巢軍に

加わったものである。<sup>13)</sup> この一群は、軍隊にあっては驍卒ともなり、野にあっては盜となる。所謂無賴なる性格に出ずる者である。それ故に軍事的能力を發揮するが、利害によって動かされ、いわば龐助的なものをもっている。李罕之・秦彥共に形勢が不利となると、高駢に降っている。そして以後も農民の立場を考えぬ、兇暴な軍閥—軍賊とも言うべき性格を發揮する者である。

以上數名は、亂の途中何れかの時期に唐側に降って、黃巢軍への討伐側にまわった者ばかりで、それ故に、歴史の記録に片影を止めた者のみにしかすぎぬが、以て一端はうかがえよう。

### ⑩ 群盜・草賊

王仙芝、黃巢の亂において、それ迄における群盜・草賊の充滿を前提とせずには理解出来ない。その事は、第一節に於いて、裘甫・龐勛の亂において眺めて來た所と同様である。又第二節で引用して置いた通鑑の記事にも、饑饉線上をさまよう農民が、何處に訴える術もなく、相あつまって盜となったと記してある所である。この盜・草賊は、既に指摘されている如く、當時の農民が、逃亡という消極的反

抗から、積極的反抗へと轉化して、組織された小集團とも理解される。少くとも、追いつめられた農民の、善惡を越えた唯一の生存手段ではなかったかとも思われるのである。<sup>14)</sup> 大體王仙芝・黃巢が軍を起す曹州・濮州の邊りは、江蘇・河南・河北・安徽・山西・山東六省の喰い合った屈竟の境で、盜賊の産地である。<sup>15)</sup> 文宗開成二年七月に鄆州が平陰縣を復活したが、それは「以て盜賊を制せん」爲であった。<sup>16)</sup> 龐助の亂でも光蔡淮浙兗鄆沂密の群盜が参加し、又これらの地方はその戰亂の被害も大きく受けている。その亂の平定後もその餘黨が、この地方に分散して活動していた事はさきに擧げた。

所で注意すべき事は、王仙芝・黃巢が一ヶ所で事を起して、それを中心に大きくなって行つたのではなくて、相前後して、各地で廣範な蜂起があつたらしい事である。或いはかゝる情勢の上に、王仙芝らの擧兵が推し進められたと言ふ事も出来よう。即ち、乾符元年末には、徐州軍が群盜の活躍を持て餘し、兗鄆等の道から出兵している。<sup>17)</sup> そのすきに鄆州治下で王仙芝・黃巢が事を擧げている。と同時に又、群盜侵淫、十餘州を剽掠し、淮南に至り、多きは千餘人、

少きは數百人であつたと記録されている。<sup>18)</sup> また三年天平軍(鄆州)が王仙芝の圍む沂州の救援から途中まで還つて來たが、北境に復た盜起るを聞き、留つて扞禦を命ぜられて居る。<sup>19)</sup> 唐朝でも、天下鄉村に弓力鼓板を置いて群盜に備えしめてゐる。<sup>20)</sup> 更に又「招討王仙芝等詔」<sup>21)</sup> にも「近頃諸道の奏報に準ずるに、草賊稍多し。江西淮南宋亳曹潁、或は郡縣を攻め、或は鄉村を掠む」と各地に草賊の蜂起を述べ、「王仙芝及諸賊頭領云云」とある。以上の諸事情を徴するに、相前後して、廣範な地域での彼らの蜂起、活躍が認められるのである。<sup>22)</sup> それ故に後節で述べる如く、唐朝でも、初めは王仙芝・黃巢集團の重要性を誤認した形跡がみられるのである。そして亂の發展の經過の中に、黃巢集團を中心に求心的に結節されて來ているとみられる。

### ○ 農民

上述群盜・草賊と言うも、多くは逃戸を以て形成され、従つて大部分は農民に外ならない。こゝで農民と言つたのは、現に土地を耕作している者が、黃巢集團に加入して行つた者を便宜上狭く指す。通鑑に、山東の重斂に困れる者が争つてこれに歸したとある如く、<sup>23)</sup> 進んで参加する者もあ

ろうし、又強制的・徴發的に驅り入れられた者もあろう。しかしそれらの具體的事情は、明らかにする手段を持たない。尙又豪族の動向に就いても具體的な史料を見出してない。しかし前後何十萬の大衆の主要部分は彼等て占められていたと見る可く、群盜等の失業農民と共に、この亂を動かした主要要素である。

要するに塩の專賣と密賣との間の緊張の尖鋭化、支配階層への仲間入りを阻止されているという不満など、唐朝支配から追いつめられている立場に立ち、それを通じて民衆の生存の絶望的立場に共感した王仙芝・黃巢らを頂點として、生存のぎりぎりにまで追いやられた饑餓線上の農民、失業農民―逃戸・群盜―などを基盤として、その間に農民中の積極的に反唐朝鬭争を推進せんとするもの、知識階層中の不満分子、前二回の叛亂の經驗者、機會をつかんで風雲を望む野望家から、軍閥の首領・幹部などで有利な方に付かんとする浮動層に至る諸分子が、色々な階層をなしてとりまいていたのである。そしてそれら相互に入り組んだ力のバランスのあり方によって、色々な経過の様相を呈しているわけである。

## 〔註〕

- ① 通鑑二五二・乾符二・六。
- ② 新黃巢傳。
- ③ 通鑑二五二・乾符二・六。宋人撰平巢事蹟考。
- ④ 堀敏一氏・唐末諸叛亂の性格―中國における貴族政治の沒落について・東洋文化・昭二六・一一。
- ⑤ 舊王播傳附王起傳（一六四）。同様の事は、舊紀・會昌四・一二。
- ⑥ 舊五代史一八敬翔傳。
- ⑦ 舊五代史二〇謝瞳傳。
- ⑧ 舊五代史一六葛從周・張歸霸・張歸厚傳。
- ⑨ 舊五代史二一張全義傳。
- ⑩ 新（一八七）・舊（一八二）傳。
- ⑪ 新・舊五代史・梁太祖傳。
- ⑫ 舊五代史一五李罕之傳。
- ⑬ 舊傳（一八二）。
- ⑭ 池田氏は一つの常時的な武力抗爭集團であることはまちがいないようにおもふが、かれらなりの解放區をもっていたのかもしれないと述べている。（前掲論文）谷川氏はこれを承けて論證の試みをして居られる。（前掲論文）
- ⑮ 内藤博士・中國近世史・第二章・黃巢の亂。
- ⑯ 舊紀・開成二・七・甲申。
- ⑰ 通鑑二五二・乾符元・一二。
- ⑱ 通鑑二五二・乾符二・一二。
- ⑲ 通鑑二五二・乾符三・正。
- ⑳ 同上二月。

②全唐文八七。舊紀は四年三月に載す。新紀は三年三月。

②當時の群盜充滿と相互響應を重視されているのは、日野開三郎氏・唐末混亂史稿一・九州大學・東洋史學十輯。

③通鑑二五二・乾符二・六。

## 五

十年にわたる経過を詳細に跡付ける事はこの小論で出来る事ではない。又周知の如く唐末の史料は混亂しているもので、それを一々整理して行く事も、そう簡単な事ではない。それでたゞ重要な事のみを取り上げて、一通り経過をたどってみる。

僖宗即位の乾符の初め、濮州の人王仙芝が數千の徒と長垣（河北大名府）に事を起したのが發端である。通鑑は元年末にこれをおき、又考異に於いて諸記録を擧げてその所以を説明している。諸記録の一致する所は、二年の五月六月頃、王仙芝及尙君長らが、濮州曹州を陥れ、天平節度使薛崇を撃破した事に始まる。黄巢が呼應して立ち上ったのは何時かも充分明確でない。新舊紀は四年三月に至ってはじめて黄巢の事を載せている。通鑑は二年六月の頃にこれを載せ、更に乾符四年四月黄巢が尙讓と查牙山にこもった記

事についての考異中、二年王仙芝が曹濮州を陥れた時すでに黄巢が事を起していたとすべきであるとしている。

とにかく二年夏頃迄に、濮曹州の邊りから山東にかけて活躍し、はじめは數千の衆が、數月の間に數萬に至り、重壓に苦んでいた民が争ってこれに歸した。その十二月には沂州を攻めている。唐側では平盧節度使宋威が諸道行營招討草賊使となり、河南方鎮の兵を統べてこれに當り、三年七月頃王仙芝軍を大破撃退したが、唐軍も一大失態を演じた。宋威は王仙芝敗北と誤認し、諸道の兵を解散して青州まで還った所、王仙芝がなお各地を攻剽している事がわかり、再び兵を招集したので「士皆忿怨、亂を思ふ」とみえている。舊紀及び冊府元龜（征討部）では、三年七月頃河南十五州を侵していると記している。かくて第一次討伐作戰は完全に失敗に終った。

さてこの邊りの経過をみるに、唐朝では王仙芝等を、數多い群盜・草賊の一つと見て、餘り重大に考えていなかったかに見える所がある。一つには他にこの頃南詔の侵寇があり、二年四月と六月の頃西川突將の亂、又二年四月には財政的に重要な浙西で王郢の亂が起り、唐軍をてこずらせ

ていたりした事も關係あろう。が又一面前節で述べた如く、王仙芝と相前後して、各地で廣範な蜂起があり、その地盤の上に王仙芝の舉兵が、又それに呼應した蜂起が、連鎖反應的に起つていた事情を反映していると思われる。宋威の任務が、招討草賊使という名で表わされて居り、又「招討王仙芝詔」でも、王仙芝及諸賊頭領云云とある事からも、數多い小賊の有力なものを見ていたらしい。又王仙芝等の蜂起のもつてゐる意味、重大性を充分認識していなかった事は、三年十二月彼に官を與えて招安する事の可否について、宰相連中が「王仙芝小賊、龐勛の比にあらず」としてゐる事、即ち、龐勛の職業専門軍人の亂に比すれば、素人の失業農民からなる農民軍や、群盜の集團と軽く評價してゐる。こゝに、褒貶、龐勛の亂を支持し發展させたもの、そして今又獨力で事を起している、おいつめられた民衆の爆發した力とその革命的な意味を充分に認識する事が出来なかったのである。

さて乾符三年は一つのやま、或いは危機であつた。王仙芝は汝州を陥れ、東都に鋒先を向けかけ、士民を震駭させたが、鄭州で撃退された。十月頃から南して唐鄧から郢復州

を陥れ、光廬壽舒通等州を轉攻したが、蘄州を攻撃中の事、刺史裴偃と王仙芝軍中にあつた王鐔の取りなしで、王仙芝が招安に應ずる事となり、左神策軍押牙兼監察御史の官を授けられた。所がこの時黃巢が「始め共に大誓を立つ。……この五千餘衆をもつていつくに歸せしめんや」と怒り、衆又大いに騒いで止まらず、王仙芝は彼等の怒りを畏れて中止した。その結果黃巢集團は王仙芝と別れて別行動を取る事になった。この事は、龐勛の亂で、龐勛が大衆の要望を理解せず、自己の官位のみを求めた結果、大衆の離反を招いた事を論ずる時、王仙芝も亦かゝる龐勛的なコース（節）節鉞を求めるもののコースとして指摘されている。これに對して黃巢は安易な妥協を排し、大衆の力に深く信を置き、彼等と共に行動せんとする態度に大衆の信頼を勝ち得たのである。というよりも、むしろ黃巢をして、自信をもつてかゝる行動を取らしめ得た程、大衆の情熱の深さ、反唐朝的精神の激しさが存在していたのである。あくまでそれに確信をおいた黃巢が、それ故に王仙芝敗死後、その餘衆を統合して、統一集團の長と推されたのである。

それにもかゝらず王仙芝はなお龐勛的なみち（節）官職へ

のちをすゝみ、爲に唐朝の計略にひつかかつて自滅して  
了った。王仙芝は此後鄂州から湖北を轉攻し四年末に江陵  
攻略にかゝった。この時招討副都監楊復光の働きかけに乗  
つて、王仙芝は有利な條件で招安に應ず可く、副統帥尙君長  
をその交渉に派遣した所、途中宋威の手に捕えられ、殺さ  
れて了った。<sup>8)</sup>こゝに王仙芝は大いに怒つて江陵を攻め立て  
た。所が唐側でも招討使宋威を罷めて、曾元裕に代え、又  
西川節度使高駢を荆南節度使として、王仙芝が招安に應じ  
ようとしている虚に乗じて追撃態勢を整えていたので、王  
仙芝は五年二月蘄州黄梅縣に擊破され、敗北の運命をたど  
つたのである。<sup>9)</sup>こゝに龐勛型のコースの例を再び繰り返え  
している。

しかしこの事は半面黃巢集團をして一層團結を固め、そ  
の革命的立場を強化せしめた。時に黃巢は亳州を攻めてい  
たが、尙君長の弟尙讓が王仙芝集團をひきいて黃巢に合流、  
黃巢を推して王とし、王覇の年號を立て、組織をつくつて  
假政府を形成した。<sup>10)</sup>

その後沂州濮州方面で相當打撃を與えられたらしい。こ  
ゝで天平節度使張勳を介して降服を乞うた。唐側は右衛將

軍に任ずる代り、鄆州で武装解除すべき事を通じた。恐ら  
くこゝで王仙芝の二の舞を豫想したのであらうが、黃巢は  
この擬裝降服で時をかせいで、危機を脱するや、<sup>11)</sup>西して洛  
陽攻略の形勢を示し、當時荆襄方面にあつた招討使曾元裕  
の主力を、洛陽防備に北へ引きよせておいて、南方が空虚  
になったに乗じて南へ轉進し、五年三月には渡江、江西に  
入り、虔吉饒信等州を轉襲した。非常に巧妙な戰術を展開  
している。大體どの亂でも所謂賊軍は、唐軍主力と正面か  
ら衝突する事を避け、防禦の手薄な所をねらつて重點攻撃  
をやるので、なかなか捕捉し難い事は、武宗時代の宰相李  
德裕も指摘している。<sup>12)</sup>

王仙芝集團の一部は又、王重隱・曹師雄などを中心とし  
て浙西を荒していた。彼らは鄆州方面の者が多いので、か  
つて鄆州節度(天平軍)使で、交趾で南詔討伐で威名高い高  
駢を、荆南から鎮海節度使(治越州紹興縣)として防禦の重  
鎮とした。この邊りでは黃巢軍も屢々打撃を受け、餘りふ  
るわなかつたようで、防備の手薄な福建へ潜入した。<sup>13)</sup>一  
つには高駢は歴戰の第一級武將と考えられ、唐軍の強力な主  
力の一つであつたので、これを避けた點もあらう。又一面

では、江南地方は後進地であり、土豪の勢力が強く、彼等を中心反革命的な自衛集團が成立、組織化されつゝあつたようである。例えば有名な杭州八都——王郢の亂、王仙芝の支隊曹師雄の杭州侵寇などに當つて、錢塘地方の土豪層及びその支持によつて、八都なる自營組織の聯合體が形成されているなどその一例である。<sup>14)</sup>又湖州には數千人を俱した十五の都頭が存在して居り、<sup>15)</sup>浙江明州湖南潭州などにもその例が見られる。<sup>16)</sup>又黃巢が福建に入った時、建州の人陳巖が數千を集めて郷里を防禦し九龍軍と號した事例も見られる。<sup>17)</sup>ともかく、北方地方における程農民層の壓倒的支持も得られなかつたかに思われる。

乾符六年のはじめ、高駢軍に屢々擊破された。この狀況不利の時、秦彥・畢師鐸・李罕之・許勣等數十人が高駢に投降した。第四節で構成要素を分析した㊦の分類に入る者達であつて、その經歷等から見て、農民的立場からかけ離れた存在で、利己的な目的からする便乗組である。この形勢不利の時にまづ第一に脱落して行つた。だから彼等は唐朝への忠勤の故ではなく、従つて以後も兇暴な半軍賊的な軍閥へと發展して行つてゐる。

黃巢軍は六年五月頃に廣州を包圍した。こゝで直ちに陥れる事なく、この狀況を利用して、唐側と取り引きを始めている。即ち嶺南節度使李迢、浙東觀察使崔瑒を介して天平節度求めて容れられず、次いで廣州節度使を求めた。唐朝では、鄭畋がもつて僻遠の地に羈縻すべき事を主張したが、<sup>18)</sup>廣州はアラビア等外國貿易の據點で、この利を失う事を恐れる主張が通つて、六月に黃巢を單に率府率に除する事にした。これについて考異に引く實錄では士卒瘴疫にかゝる者が多いので、嶺表に據つて永く巢穴となさんとしたのだらうとしている。黃巢はこの邊りまでは、恐らく唐朝を打倒してどうしようという目標はなかつた様であり、たゞ本能的な反抗による剽奪を事としていたようである。そして福建潛入前後から、狀況が不利となつて居り、南方僻遠の地に逐い込められたが、氣候が悪く、この邊りで廣州を陥れないことを條件に、一時的にもせよ招安に應じ、人々の休養、兵力の溫存、整備を考えたのではないかと思われる。<sup>19)</sup>

しかしこれが唐朝の容れる所とならざるや、一時収まりかけた反唐闘争は又急激に燃え上り、九月頃一舉に廣州を



陥れ、豊富な貨財軍需物資を確保して、今度は「打倒唐室」を目標に、自らの政權を樹立すべく、急ぎ北伐を開始した。この意味で、廣州における時期は、この亂の經過に一轉期を劃している。自ら「義軍都頭」と號し、史家をして「皆當時の極弊である」と附記せしめた、當時の支配者機構の缺陷をするべくえぐり出した宣言を發し、自ら解放軍として北伐戰を展開する。その宣言は「宦豎朝を柄り、紀綱を垢蠹する事を詆り、諸臣と中人と賂遣交構の狀、銓貢才を失する事を指摘し、刺史財を殖し、縣令賊を犯す者等を禁ず」るものであったと記録されている。<sup>21)</sup>

黃巢軍は桂州から大槪數千を編み、暴水に乘じ湘江を下り衡・永州を突破、十月には潭州を衝いた。内藤博士は、流賊の通る路は大體定まっていた、黃巢の、湖南を通って洞庭湖から揚子江に出て北する路は、後長髮賊の通った路も同様であると指摘されている。<sup>22)</sup>唐朝でもほゞその道筋を察し、これより先き、宰相王鐸自ら陣頭に立ち、荆南節度使諸道兵馬都頭となり、荊州(江陵)に陣し、泰寧節度使李係をして、精兵五萬と土團の兵をもって潭州を守らしめていた。又高駢を鎮海から淮南節度使に移し揚州に陣せしめ

るなど、黃巢北上の防禦體制を張っていた。所が新しい意氣込で北上した黃巢軍の前に潭州は一日にして陥つて了つた(乾符六年一〇月二十七日)。<sup>23)</sup>先鋒尙讓は勢をかって江陵に逼り、衆五十萬と稱していた。江陵では、諸道の兵が容易に集らぬので、王鐸は襄陽まで退がり、劉漢宏に守らせたが、劉漢宏はたちまち軍賊化して焚掠して去り、江陵も容易に黃巢軍の手に落ちた。ついで北して襄陽に向い、唐軍の本軍と正面衝突をしたが撃退され、道を轉じて江東を下り、鄂州から饒信池宣歙等を轉攻し、河南一帯を制覇した。

こゝに頼むは高駢のみとなつた。翌廣明元年高駢が王鐸に代つて總司令官となり、諸道の兵を徴し土客七萬、唐側は深くこれにたよっていた。黃巢軍もこれには敵し難く、局部的に撃破される事が多かつたので、巧みに降服する氣配を見せた。高駢は非常に甘く評價し、節鉞で誘致し得ると確信し、諸道の聯合軍を解散せしめて了つた。唐室打倒を目指している黃巢軍はこの狀勢を見て、直ちに攻撃を開始し宣州を陥れ、采石(安徽當塗縣内)から江を渡り、天長(安徽天長縣)、六合(江蘇六合縣)を圍んで了つた。<sup>24)</sup>高駢は聯合軍の解散後であり、又一面將來自立の遠望もあつてか、

兵力を温存して、たゞこれを見送つて了つた。時に河南諸道の兵激水に集結する手はずになつていたが、相互の反目から勝手に解散して、齊克讓軍が汝州鄭州の間に孤軍取残されたまゝ、長安までの路が空虚になつて了つた。

樂々と淮水を渡つてからは、たゞ長安を占領するのは時日の問題となつた。こゝに黃巢軍は剽掠を止め、軍容を整え、壯丁のみを取つて兵力を充實して進んだ。黃巢軍は、「各自壘を守つて吾が鋒を犯す勿れ、京邑に至り自ら罪を問わんと欲す、他人に預るなし」と牒を轉じ、諸軍又徒らに兵力を損ずる事を恐れて傍觀するのみであつた。十一月十七日には洛陽を陥れ、十二月三日潼關<sup>25)</sup>が陥つた。この頃河中留後王重榮がこれに加擔した。五日には僖宗出奔し、後を追つて長安に無血入城、十三日に帝位に即き、國號を大齊と號し、年號を金統と定め、尙讓を太尉兼中書令とする等中央政府樹立にかゝつた。この情勢に應じ周邊の諸藩鎮も、忠武留後周岌、感化軍留後時溥、平盧軍留後王敬武、河陽軍節度使諸葛爽などこれに降り、河中の王重榮はさきに參加して居り、こゝに陝西・山西・河南・安徽・山東等の地方を統一する形勢が出来上つた。

# 〔註〕

①私は嘗つて黃巢の亂の年表を作つた。唐末には正確な記録を欠いているので、諸記述が混亂し、相矛盾する所も多い。今經過の略述に當り、一々據り所を註記し異同を記す事は繁雜にもなり、又紙數も許されていないので、重要と思われる以外は省略する。主として據る所は、通鑑及考異・新舊紀・新舊黃巢傳・平巢事蹟考、冊府元龜などである。

②通鑑二五二。

③通鑑二年一二月。冊府元龜(征討部)・舊紀四年三月。新紀三年三月。

④通鑑・事蹟考三年七月。新傳。

⑤通鑑二五二。

⑥通鑑二五二・新舊傳・事蹟考。通鑑三年一二月、事蹟考十月。

⑦王丹岑氏、及谷川氏前掲書。

⑧通鑑二五三・新紀・事蹟考十一月。舊紀五年二月。その真相については、記録が混亂して明らかでない。

⑨この年月は通鑑二五三・新舊紀・冊府元龜征討部皆一致する。舊傳のみ八月。

⑩通鑑・事蹟考二月。

⑪新傳・「巢度藩鎮不一、未足制已、即叛去」。

⑫通鑑二四三・會昌三・八。

⑬通鑑二五三・五年八月、事蹟考七月、舊紀三月、新傳六年三月。

⑭谷川氏・唐代の藩鎮について・四杭州八都。

⑮吳越備史一・乾寧四年條李繼徽傳。

①6 日野氏支那中世の軍閥・第五章。

①7 通鑑二五六・中和四年。

①8 冊府元龜三一四・謀猷部。

①9 この廣州の包圍・陷落の年月に就いて。通鑑(二五三)は六年五月包圍九月陷落とし、新舊紀は五月、事蹟考は九月にかけける。

冊府元龜(三一四・謀猷・三三三・罷免)は五月包圍とする。桑原博士・カンフウ問題特にその陷落年代について(東西交通史論叢)は、スレイマンの記述を自己の觀察で補ったアブリザイドの記述に、ヘジラの二六四年とある事から、乾符五年の事とすべき事を指摘された。しかしなお幾多の問題も存し、中國史料は混亂しているが、王仙芝敗死とか、廣州の陷落とか、長安陷落など重要な所は、略々ある所まで一致しているので、直ちにこれを訂正し難い。今中國史料に従っておく。

②0 アブリザイドの傳える所では、マホメット教徒以下外國商人十二萬人を斬殺した事、及び桑の樹を伐りたおしたので、アラビアへの絹貿易を終結させたと記しているのは有名である。この事實について、外國商業資本・高利貸資本に對する憎惡のあらわれであるとの解釋も出来るが、實際の目標はその財貨にあったのではないか。都市住民の大量殺戮は、同朋に對しても向けられていた。G. Ferrand: Voyage du Marchand Arabe Sulaymân en Inde et en Chine rédigé en 851, suivi de Remarques par Abû Zayd Hasan, Paris, 1922.

②1 新傳。

②2 中國近世史・黃巢の亂。

②3 通鑑二五三及新紀、考異に引く實錄。事蹟考は十一月。

②4 通鑑二五三・舊紀・事蹟考・冊府元龜(四四七・縱敵)共に廣明元年七月。

②5 通鑑二五四・新紀。

②6 通鑑二五四・新舊紀。

②7 舊紀・舊傳は五日帝出奔の夕方とす。新紀は七日とす。

②8 通鑑二五四・舊紀・舊傳。

## 六

長安入城の様子は次の如く傳えられている。黃巢は金輿に乗り、從者又正裝し銅輿に乗り、從者騎士數十萬、又彼等は髪を被り紅繒でたばね、錦繡を着、甲騎流るゝが如く、輜重千里につらなり、人々は道をはさんでこれを觀たとも言う。②誠にすばらしい光景であつたであらう。しかし考えてみると彼等に取つては、誠に記念すべき輝かしい一瞬であつた。又後世の吾人から見ても、驚歎すべき歴史的事實であつた。唐朝支配の矛盾から吐き出されたような、農民・逃戸そして草賊・群盜などの一揆から始まる彼らが、六年の歲月にわたり、幾萬里の道を、中國の南北往復を歩き破つて困難な戦の末、大唐帝國の皇帝を逐い拂つて、人民

政權を樹立したのである。

長安入城に當つて「黃王は生靈なり。李家（唐朝）汝輩を恤まざるに似ず、但安家せよ」「黃王の兵を起すは、もと百姓の爲なり」と告諭し、貧者を見ては金品を施し與えてゐるなど、新しい人民政權にふさわしい事情を傳へてゐる。<sup>あ</sup>

しかしこの新政權も永く續かず、二年程で長安を放棄しなければならなかつた。これについて、王丹岑氏は、失敗の原因として、黃巢は終始不妥協不投降の精神で革命的立場を堅持し、一部内部の動搖變反にかゝわらず、よく團結を固め、軍事的勝利を獲たが、たゞのような政權を定め、社會秩序を安定し、社會生産をどうして恢復するか<sup>い</sup>の能力を持たなかつた故であるとしてゐる。たゞ唐朝政權打倒のみが目標であつたので、その目標達成後新しい目標を建てる事が出來ず、逆に人心の離反を招いて了つた。幹部では、軍中には、妄りに殺人しないよう、秩序の維持を命じたが、<sup>あ</sup>兵卒中には、盜を常習とせる者、又長時の剽奪の經驗を脱し切れず、入城後數日で大掠奪が始まり、これを制する事が出來なかつた。敦煌零拾所收韋莊の秦婦吟にその慘狀が

みえる。官吏を憎んでみなこれを殺したというのは、彼らの唐朝支配への憎しみが如何にひどかつたかを物語る。又詩をもつて彼らを嘲う者があると、詩を作る者を捕えて殺し、字を識る知識階級の者は賤役に就かしめ、三千人ばかりを殺してゐる。廣明二年四月、一時唐軍が長安を奪回した時、人心の離反は長安人士の唐軍の熱狂的歡迎となつてあらわれてゐる。直ちに長安を再び奪取した黃巢軍は、これを怒つて、長安の人士八萬人を殺し、流血は路を洗い、これを洗城と稱する暴舉を敢て犯してゐる。

更に重大な錯誤があつた。唐王室を逐い、都を占領すれば最終目的が達せられたと考へた事である。しかしこゝに至つては眞の鬭う可き相手は、唐王室ではなかつた。唐朝支配權は節度使の手に分割されていたのである。彼等は兵權と共に民政權も持ち、財政的基礎も確立してゐた。それ故長安を占領し、政府を樹立しても、鬭いの途はまだ遠かつたのである。王丹岑氏も指摘してゐる如く、<sup>あ</sup>黃巢軍は長安占領で目的を達したかの如く、軍事的攻勢を止め、唐朝に見做つて傳統的な文物制度を整へるのに努力を盡くしてゐた。その爲に、唐側では、鳳翔節度使鄭畋等が中心とな

り、諸軍閥を糾合して、反攻態制を整える時を假して了った。その結果その包圍を受け、今までの攻勢から守勢に轉じて了った。又軍需面で破綻を來した。使を四方に派し河中を調發し、民その苦にたえずという有様になった。こゝに又人心の離反をうみ出した。黃巢に付いていた河中留後王重榮は、行先に見切りをつけて、再び唐側に走った。やがて周岌、時溥、諸葛爽等諸軍も離れて行つた。かくて長安數百里内に包圍されて、持久戰に膠着されて了った。

以後四年半の歴史は黃巢軍の末路と、戰亂の犠牲となつた農民の悲惨な狀況を追う事になる。限られたこの小論ではその餘裕がない。たゞ重要な一二を指摘するに止める。

さてそのうち諸軍、十數の諸鎮の聯合軍の包圍が次第に強化された。軍事的には優劣はつけ難かつたが、經濟的に困窮して來た。こうして一年九ヶ月を経て、決定的な出來事が起つた。その一つは、中和二年九月、軍事力の中心であつた朱溫が唐側王重榮に降つて、同華節度使となり、これを敵に廻さねばならなかつた。その二は、聯合軍が沙陀の李克用の率いる外人部隊を導入する事によつて決定的となり、中和三年四月黃巢は長安を放棄した。やがて、蔡州節

度使秦宗權と兵を連ねて陳州を圍むが、生産は破壊されて居り、全軍饑餓狀態に陥り、自暴自棄になつて、許汝唐鄧孟鄭汴曹濮徐兗等州にわたり甚だしい被害を受けた。かくて四年に入ると、李讜、楊能、霍存、葛從周、張歸霸・張歸厚等相ついで投降し、大部分は朱溫軍に吸収された。最後には副統領尙讓も降り、黃巢討伐軍に廻つた。最後に孤立した黃巢一族は四年六月頃、鄉里に近い狼虎山で、甥林言の手にかゝつて終末を告げたのである。<sup>8)</sup>

#### 〔註〕

- ① 新傳。
- ② 通鑑二五四・廣明元・一二。
- ③ 舊傳・通鑑二五四等。
- ④ 前掲書二四三頁。
- ⑤ 新傳。
- ⑥ 前掲書二三〇頁。
- ⑦ 通鑑二五四・廣明元・一二。
- ⑧ 本節に記した邊り、末期の事柄は、月日に至るまで、比較的諸記錄の一致を見る事が出来る。

## 七

最後に朱溫の投降に就いて。朱溫が屢々王重榮に困らし

められていた事、又黃巢軍中孟楷の專權に反目してであるなどの理由を傳えているが、彼を動かしたのは、親將胡眞・謝瞳のすゝめであるという。<sup>1)</sup> 胡眞は少時縣吏であつたが、黃巢軍中では名將と稱せられていた。<sup>2)</sup> 謝瞳については第四節で指摘して置いたが、咸通末進士の落第者、長安で朱溫軍に投じた者で、朱溫軍中の知識分子である。その點裴甫や龐助の場合と同じく、最後迄農民の革命性を充分評價出来ぬ知識分子の消極的弱さが、朱溫をして、黃巢軍に見切りをつけて、背信的行動に走らしめたと言う事も出来る。

それに關聯もするが、黃巢の亂の經過をのみ追ひすぎているので、この十年の間に、いくつかの變化が起つており、又民衆の闘いの場合は、黃巢軍のみではなくて、もっと廣いものになつていた事を見逃してはならない。しかし今詳述するいとまがないが、第一は禁軍が全滅し唐王室は全く無力化していたことである。その結果軍事は各藩鎮に分散し、従つて各藩鎮は獨立的勢力を強化して來たことである。第二は、唐朝に忠勤の念のある儒臣藩鎮が姿を消して、軍能力のある武人のそれに置き代へられて來ており、しかも自占藩帥が増して來たこと。しかも黃巢討伐に目を蔽わ

れ、招安の結果のみ重視した爲、賊將出身の藩帥が生れて來ていた。かくて一言で言えば藩鎮の群雄化が生じて來ていた。それと共に、彼等のうちには、兼併を企て相侵攻する風潮が生れて來ている。又著しい現象は軍賊——軍隊でありつゝ、剽奪を行い轉掠する者の出現増加である。黃巢の亂初期の王郢・中期に於ける劉漢宏、末期に於ける秦宗權など代表的なものである。彼等は黃巢の亂と同じ場から生れ出たものであるが、黃巢軍が聯合軍の攻撃の前に苦闘している間に、民衆の闘いの場合は徐々に擴大していた。<sup>3)</sup>

上述私は黃巢の亂を少々美化し過ぎたような氣もする。實際は、長安占領時の宣言の如く、必しも民衆の友、解放者でもない面のある事は、長安占領後の行動にもみられ、又乾符三年末王仙芝が斬州を陥れた時、城中の人は半ば驅り立てられ、半ば殺され、家屋は焼き拂われて居り、同五年正月江陵退出の時も城市を焚掠し、三十萬の戸の三四割は殺されたなど傳えている。長安占領後王重榮を唐側に走らしめた河中の調發も又想像される。

謝瞳や朱溫は、かゝる状況に於いてこゝに闘いの場を變えたものと見る事も出来る。人心の離反のうちに自滅を待

たず、軍閥として再生産をはかったのである。いわば、官服で擬装した叛亂軍である。それは叛亂軍というおりから自由に野に放たれた虎である。しかしてその敵は唐王室でなく、相互の軍閥であつた。如何にして身を守りつゝ、自らの政權を樹立するかという事であつた。以後の歴史は、この官服の叛亂軍同志の争覇に移る。そしてこの新しい政權を目指して闘う者は、黃巢の亂の歴戦者、及びそれと同じ地盤から生れて来る民衆である。以後の三十年ばかりの歴史では、數萬の兵力は直ちに集まり、一、二萬の殺戮はいとまがない。それ程黃巢の亂と同じ大衆がより大規模に生産されていたのである。

かゝる場合にあって、眞の闘いは、如何にして社會を安定し、生産を恢復するかに移つて來ている。八八〇年代も末になるとかゝる曙光があらわれて來た。張全義が河南尹となり、刑を軽くし、租税を免じ、寇盜と闘いつゝ、農業生産の恢復を計っている。<sup>5)</sup> 又通鑑に、時に藩鎮各々兵力に務めて民を養う事をしなかったが、獨り華州刺史韓建が流散を招撫し農桑につとめ、數年で民富み軍費が充實したなと傳えている。<sup>6)</sup> 又謝暉傳には、頗る政績ありともあり、又滑

州に十三年治する間、戸を増すこと五萬であつたと言う。黃巢の亂は朱溫の背信によつて敗北を早めた。しかし一面民衆は闘いの場を變えて、常に闘つた。朱溫の轉回は、かゝる歴史の流れの中において行われ、それを推進した。そして遂に、唐代貴族を全滅させて、この無學の盜賊上りの朱溫——朱全忠のもとに、民衆の下層出身者や黃巢の亂の將士によつて、新しい政權が樹立されたのであつた。

〔註〕

- ① 通鑑二五五・中和二・九。舊五代史二〇謝暉傳。
- ② 舊五代史一六胡眞傳。
- ③ 參考・日野開三郎氏・唐末混亂史稿・東洋史學十輯。
- ④ 通鑑二五二及二五三。
- ⑤ 通鑑二五七・光啓三・六。
- ⑥ 同上文德元・四。

## **Political Strife from the Reign of Empress Wu to the Beginning of the Era of Emperor Hsuan (玄宗)**

*Michio Tanikawa*

There are two theories on the political structure of T'ang (唐) prior to the revolt of An Lu-shan (安祿山); the new landlord-merchant class was already strong enough to cope with the aristocracy, or the latter was still in ascendancy. Which is right? The political strife in this period may be defined as that between the imperial clan including relations by marriage and the court dignitaries. With a view to increasing its influence the former recruited many government officials from the landlord-merchant class and at the same time promoted the ranks of Buddhist monks, while the latter representing the old aristocracy made struggle against the former, emerging in victory. The political strife was thus fought between the two cliques of the aristocracy, but not between the aristocracy and a newly emerging social class. However, at the same time the fact should be taken into consideration that the influence of the common people had become so strong as to lead to the disruption of the ruling class into two camps.

### **Revolt of Huang Ch'ao (黃巢)**

*Norio Yoshimine*

We find various revolts in the latter part of the 9th century, resulting from the desperate conditions of the populace under the rule of T'ang (唐). Some of these are the revolt of Ch'iu Fu (裘甫) (859-860 A.D.) and that of P'ang Hsün (龐勛) (874-884), but the final and biggest was that of Huang Ch'ao (黃巢), which lasted from 874 to 884. Huang Ch'ao recruited his supporters from various social strata, including peasants, bandits, soldiers and even intellectuals. He was clever enough to screen those who were suspected of their loyalty, and survived struggle for a period of ten years during which time he drove out the T'ang emperor, occupied the capital, and established his own rule. His success was due to the fact that he took advantage of dissatisfaction and resistance of the oppressed people, but eventually misrule after the occupation of the capital led to his downfall. Though the revolt itself did not lead to the collapse of the T'ang dynasty, it was one of its main causes.